

令和 4 年 6 月 10 日現在

機関番号：13103

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K17745

研究課題名(和文) 伝統音楽の教授法・学習法とその変化～明治・大正期能楽を中心として

研究課題名(英文) Teaching and learning methods of traditional music and their changes; focusing on Noh music in the Meiji and Taisho eras.

研究代表者

玉村 恭 (TAMAMURA, Kyo)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：50575909

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：研究成果は以下の三点に要約される。(1) 明治・大正期の能楽においては、こんにち伝統的な教授法・学習法として正統とされるものとは違った形の伝承法・伝習法が、機能していたことが確認された。(2) それは、当該時期に活発に活動していたアマチュアたちによって担われていたものであり、質的にも、彼らのエトスを強く反映するものであることが明らかになった。(3) そうした教授・享受のありようは、世界各地の民族音楽と称されるもの、とりわけポピュラーな性格の強いそれらと共通するところの多いものであること、伝統音楽はカノンあるいはハイカルチャーなどの文脈とは違った形で捉え得る一面を持つことが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

伝統音楽とりわけ能楽は、これまで 古典芸能 芸道 といった文脈のもとに、つまりカノン(正典)ないしハイカルチャーの観点から語られることが多かった。しかし本研究で明らかになったように、能楽は鑑賞ではなく実践を、教理よりも愉悦を求めるアマチュアたちをも惹きつけるものを持っており、広く人々の感性に訴えるポピュラリティを潜在させている。このことは、伝統の力と価値をどのように捉えるかということについて、我々に反省を迫るものである。また、近代初期の能楽はそうした側面を否定せず、むしろそれに立脚する形の教授法・伝承法を磨いてきた。このことは、学校教育・伝統文化教育の今後を考えるヒントになるだろう。

研究成果の概要(英文)：The research results are summarized in the following three points. (1) It was confirmed that in Noh music during the Meiji and Taisho eras, the traditional teaching / learning methods that were different from the orthodox one were functioning. (2) It was also clarified that it was amateurs who were active at that time that carried such methods; their ethos influenced the character of the methods. (3) It was shown that Noh has something in common with some so-called ethnomusics in that it had not only an aristocratic character but a kind of charm that appeals to the ordinary masses.

研究分野：音楽学、美学

キーワード：能楽 古典芸能・古典音楽 伝統芸能・伝統音楽 教授法 学習法 伝承法 素人 アマチュア

## 1. 研究開始当初の背景

近年、学校教育では伝統文化の教育が課題になっている。これまで学校における教育活動は、西洋由来の方法をベースに展開されてきた。音楽教育も例外ではなく、教育コンテンツの面でも、また活動をどう展開するかという方法の面でも、西洋中心からの脱却と、伝統文化の見直しの必要性が言われている。だが、音楽に限ってみても、近代以降にシステムが整備された学校での教育法と、近代化以前に遊芸・芸能の文脈の中で形をなしていったそれとは、簡単には折り合わない。改めて、伝統的な教え方、伝統文化における教授法・伝承法の特徴とはどのようなものか、どういった人間観の上に成り立ち、それが近代化によってどのように変質したのか／しなかったのか、現代に生かす道があるとすればそれはどのような仕方か、といったことを考える必要がある。これが、本研究を考案した背景である。

能楽は700年近い歴史を持つ芸能であり、その間に独特の伝承法・教育法を磨いてきた。それが19世紀後半～20世紀の近代化の過程で、近代文化とその見方・考え方と衝突する。激動の時期に能楽がどう乗り切ったのか、その際に、伝承あるいは教育という点でどんな工夫があったのか、検討することで見えてくることが多いのではないかと。そのような見立てのもと、研究対象を明治・大正期の能楽に絞った。

近代の芸能史・能楽史については多くの研究蓄積があるが、本研究が志向するような、とりわけ対素人に重心を置く伝承・教育活動の質的側面については、議論がやや手薄であった。事実レベルで誰が何をしたということにとどまらず、そこでなされていたことの文化史的な意味に踏み込んだ研究が求められる。それは、伝統文化の価値を今日的な目で改めて見直す契機となるだろう。

## 2. 研究の目的

明治・大正期の能楽に足場を定め、人々がどのような形で伝統を継承したか、しようとしていたのかを探ることが目的である。その際、とりわけ素人たちの動向に重心を置いて検討を行う。メディア環境の激変とアマチュア(素人)人口の増大、この二つは、近代初期において伝統芸能諸ジャンルが共通して経験した大きな出来事である。この出来事が教授法・教育法の面でどのように作用したか、能楽に関わる人々がそれにどのように対応したか、とりわけ、アマチュアの立場にいる人たちがそうしたメディア環境の中でどのような行動をとったか、具体的なレベルで明らかにすることを目的の核に据えた。

## 3. 研究の方法

本研究で企図したのは、近代初期において能楽に関わる人々、とりわけ素人たちが、どのような形で伝統の継承、技芸の伝承に関与していたかを、量的、質的双方からのアプローチで探ることである。どのくらいの数の人(素人)が稽古活動を行っていたか(量的把握)、また、彼らが実際にどのような営みを行っていたか、そうした活動が能楽界全体の動向とどのように関わっていたか(質的把握)を明らかにすることを試みた。

検討の対象としては、書かれたものすなわち明治・大正期に刊行された図書資料や雑誌記事と、書かれないものすなわち往時の様子を知る人の記憶や、現在も当時のあり方の名残を残して行われている伝承活動などに材を求めた。前者について、雑誌及び図書などの文字資料を収集し、また所蔵機関を訪問して閲覧するなどして精査した。調査を進めるうち、これまでも注目されることが多かった専門家(演者)による芸談とは別の、興味ないし娯楽として(つまり非専門家の立場から)能楽に携わる人々の証言が存外に多く残されていることがわかってきたので、こちらに重心を置いて検討を進めた。後者について、往時の様子を知る人に聞き取り調査を行うとともに、現在においても正統的な伝承活動、能楽享受のありようからは少しはずれたところで活動している人々の活動を参与観察し、その来歴、歴史上の意義について考察した。

## 4. 研究成果

研究を開始して程なく、量的な把握は困難であることがわかってきた。明治～大正期の雑誌や各種文献、記録等にあたることで、素人たちの多彩で活発な活動があったこと、その活動が一定の社会的インパクトを持っていたことは確認できた。他方で、ではどの時期に、どの地域で、どのくらいの数の人々が活動していたのかを特定しようとする、大きな困難に突き当たる。雑誌などでは、ある地方の能楽の教授者とそれぞれの入門者をリスト化しようとするような試みが散発的になされたが、いずれも未完に終わっている。近代化初期の段階で既に相当数の稽古人口があったようで、一地域であっても記録が追いつかない状況であったことがうかがえる。そうした数量的な問題に加えて、素人という概念の曖昧さが問題をいっそう困難にした。当時は素人と

玄人の境界が現在に比べると曖昧であり、かつ、「入門」「弟子入り」といった観念がどのくらい根付き、機能していたのか疑問である。さらに、教授法・学習法に関しても、稽古と呼んでよいのかわからない、伝承という括りにおさまるのか判断の難しい不定形の催しが、数多く営まれていたこともわかった（「稽古能」というのは公演なのか稽古なのか）。これは、素人の動向をそれ自体として切り出すことが難しいこと、つまり、着目すべき素人とは誰か、教授の場としてどこまで検討の対象にするかが、一意的な形では確定し難いことを意味する。

しかしこのことを、当時の能楽界は多様なあり方を許容する包容力を持つものであった、様々な方向性に進み得る可能性を有していた、というふうに解することもできよう。明治維新の当初から後ろ盾を失った能楽界を支える存在として、財閥の当主や華族たちの取り組みがあったことが知られている。彼らは公演のスポンサーとして経済的な支援を行ったのみならず、能楽師のもとに弟子入りして稽古をし、習得した技芸を舞台上で披露した（いわゆる「紳士能」）。しかしやがて、そうした富裕層とは別の立場から能楽に関与する人々が現れる。純粋に娯楽・余暇として能楽の技芸をたしなむ、愛好家たちである。彼らの取り組みが盛り上がるにつれ、華族たちの存在感は相対的に勢いが弱まり、能楽界に対する影響力も下火になっていったが、愛好家たちは社会的な立場も、また能楽に対する姿勢もエートスも「紳士能」の担い手たちのそれとは大きく異なる。さらに、愛好家たちは何か統一的な旗印のもとに動いていたわけではないので、取り組みの中身は人によって、また地域によってバラエティー豊かであった。能楽界は、そうしたあり方のどれかを選好してどれかを排斥するというのではなく、多様なあり方をうまく取り込み、それぞれとの良好な関係を持ち続けた。このことが、近代初期の能楽界の大きな特徴をなしていると思われる。

つまりは、量的な把握に拘泥せず質的な側面に目を向けること、単に 誰が・いつ・どこで（誰のもとで）・どんな稽古をしていたか の事実だけを見ることを超えて、そもそも能楽がどのようなレベルの芸術実践として享受・実践されていたか、その中で稽古や伝承の活動がどんな機能を果たしていたかを捉え返すことで、当時の能楽界の、ひいては文化全体の動向を、膨らみをもった形で捉え返すことができるのではないか、ということが見えてきたのである。この見通しのもとに、質的な側面を注視する方向に研究の重心をスライドさせた。得られた成果は、およそ以下の三点にまとめられる。

第一に、伝統文化（能楽）の歴史において、素人（アマチュア・愛好家）が大きな役割を果たしていたことが確認できた。明治・大正期には、多くの愛好家たちが随意に、それぞれの仕方で能を楽しんでいた。単に数が多いというだけでなく、活動の中身が多様であった。観賞よりも実践が好まれ、家元制度の枠の外での活動が盛んであった。彼らの動きは、時に専門家の目には度をはずれたものに映ることもあったが、能楽界の中枢にも一定の影響力を持っていた。そのことは、彼らの活動や行動が雑誌などに記録されていること、彼ら自身に発言の機会が与えられていることなどから明らかである。演者や研究者たちも、彼らの存在を真摯に受け止め、それと向き合う空気があった。愛好家たちの存在は、当時の能楽が広く訴求力を持っていたことの証拠であり、逆に、彼らとその愛好活動こそが当時の能楽の訴求力の一つの源泉をなしていた。

第二に、愛好家を核として営まれていた当時の能楽の稽古法、教授法・伝承法が、当時の文化において重要な意味を持っただけでなく、今日的な文脈においても意義を有することが明らかになった。素人愛好家たちを中心に（彼らに向けて、また彼ら自身の手によって）行われていた教授・伝承活動の特質は、多様であることに加えて、体系性を志向しないことである。長い歴史の中で能楽は、技芸の伝承に関してある程度の「固い体系」を作り上げていた。そうしたいわば正統的な伝承のあり方をよしとする愛好家ももちろんいたが、そればかりではなかった。人々はむしろ、娯楽性を前面に出し、技芸の上達であれ、また同志たちとの交流であれ、何より自身が楽しむことを第一義に考えた。真面目に取り組まない、というのではない。彼らはある意味で誰よりも熱心に稽古に取り組んだ。だがそれは、技芸を磨き抜いて何らかの 高み に達すること、例えば欧米の貴顕たちよろしく豊かな教養を携えて美の殿堂たる劇場に足を運ぶとか、紳士連中のように面と装束をつけて本式の能を演じるとか、社会的・経済的な支援を与える側にまわって能楽界に一目置かれる存在になるとかといったことを目指してはいない。ただひたすら、声を出し、音を鳴らし、人と合わせることの悦びに向き合っていたのだ。

それは確かに、能楽界の中枢が期待したような、高尚優美なる技芸の正しい伝承を担う演者の養成には直には結びつかないものであったかも知れない。だが、能楽に対してある種のリアリティーを感じる人、取り組み伝える価値のあるものであると認識する人が、そうした文脈の中から多く輩出したことは間違いない（論稿で取り上げた夏目漱石などは、その典型例である）。多様なチャンネルを用意しておくこと、出会いの門戸を広く開いておくことで、人々が能楽に触れるチャンスは確実に増えただろうし、そこから専門家への道を志す人が現れるかも知れない（実際、別の論稿で指摘したように、地方においてはそのような例が見受けられた）。学校教育の影響もあり、ややハイカルチャーの色彩が強くなりすぎた感のある今日の能楽文化の状況において（そのゆえに先細りを指摘する声もある）、当時の能楽教授 享受のありようは、見直す価値のあるものなのではないだろうか。

第三に、能楽が諸外国の音楽、とりわけ、いわゆる高級芸術ではなく市井で行われているそれと共通する性格を有することが示された。近代初期の能楽愛好家たちに行われた教授法・伝承法は、書記性が希薄であること、体系を志向しないこと、一部の階層に独占されず広く門戸を開いていることなどの点において、例えばインドネシアのガムラン音楽などと共通している。これま

では能楽をオペラなどに比肩する高級芸術に位置づけようとする志向が国内・国外双方において強かったが、そうした側面とは違う性格を有すること、社会階層を超えて広く一般の人に訴えるポピュラリティを持つ芸能であることも確かであるように思われる(そして、そのようなポピュラリティを生かすことで西欧化・近代化の波を乗り越えてきたことも共通する)。そうした観点から、能楽を民族音楽学的な文脈の中で捉え直すことが可能であろう。能楽の美や価値を、時間を超えた形而上学的な美学の問題に回収するのではなく、その都度の歴史的条件、文化的な環境との関わりのもとで、能楽に関わる人々がそれぞれの立場でどのような思想を持ち、振る舞ったかというレベルで考える道が開けてくる。そのことは、「生活や社会」との関わりを軸に音楽現象をとらえ直すこと、「音や音楽と生活や社会との関わり、音や音楽と伝統や文化などの音楽の背景との関わりなどについて考えること」を子どもたちに求めるようになっていて、学校教育の動向にも沿うものであろう。

なおメディアとのかかわりについては、論稿の形で主題的に扱うことが出来なかったが、いくつか見えてきたことがある。この時期、録音メディアが発達し、レコードやラジオなど遠隔地においても能楽を実践できる環境が整った。既に指摘されているように、こうしたメディア環境の変化(進化)が能楽人口の増大に寄与したことは間違いない。また、こうしたメディアを用いることにより、地方による芸風の地域差のようなものが縮小され、全国的な芸の統一に向かったということも既に指摘されている。ただ、本研究を進めていくうちに、これらの指摘と齟齬する可能性のある事実が浮かび上がってきた。まず、素人愛好家たちはメディアを活用しはするものの、それに過剰に依存はしていない。とりわけ地方で活動する人たちは、対面にこだわり、むしろ人々が多く集まる場所自体の魅力に引きつけられて能楽実践に足を踏み入れていったことが、聞き取りなどによって明らかになった。また、芸の統一についても、人びとが録音・記録されていることを鵜呑みにしたわけではなく、現場では規範とのズレや変化が生じていることに気付きつつも、ズレを温存し、場合によっては変化をさらに進めるということもあった(これも聞き取りの中から得られた情報。ある地域ならではのやり方、のようなものが目指される)。録音が統一されれば実践も統一、ということにはならないのである。これは一部地域にのみ当てはまる事情なのかも知れず、安易な一般化は避けなければならないが、メディア環境の変化と実践現場の動向との関わりについては、慎重に吟味する必要があるだろう。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 玉村 恭	4. 巻 42
2. 論文標題 人はなぜ/どのようにして能楽師になるのか	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 上越教育大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 玉村 恭	4. 巻 19
2. 論文標題 観世寿夫は世阿弥をどう読んだか：二曲三体論に即して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 能と狂言	6. 最初と最後の頁 100-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 TAMAMURA, Kyo	4. 巻 7(2)
2. 論文標題 Meliorate Meliorism: A Review of Somaesthetics and the Philosophy of Culture: Projects in Japan	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 The Journal of Somaesthetics	6. 最初と最後の頁 103-106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 玉村 恭	4. 巻 47
2. 論文標題 人はなぜ「お稽古」に勤しむのか：上田泰史著『「チェルニー30番」の秘密：練習曲は進化する』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 紫明	6. 最初と最後の頁 93-93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 玉村 恭	4. 巻 19
2. 論文標題 観世寿夫は世阿弥をどう読んだか：二曲三体論に即して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 能と狂言	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 玉村 恭	4. 巻 40(2)
2. 論文標題 人はなぜ謡の稽古に熱中するのか：夏目漱石と能 再考～稽古の現象学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 上越教育大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 687-703
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 玉村 恭	4. 巻 46
2. 論文標題 私であるという藝術(アート)：伊藤亜紗著『記憶する体』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 紫明	6. 最初と最後の頁 79-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 玉村 恭	4. 巻 37(2)
2. 論文標題 《黒髪》はなぜ三下がりなのか：教材としての三味線の調弦について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 上越教育大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 621-631
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 玉村 恭
2. 発表標題 諸外国の音楽へのコミットを妨げるものは何か：バリ・ガムランの事例に即して
3. 学会等名 日本音楽教育学会北陸地区例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 玉村 恭
2. 発表標題 観世寿夫は世阿弥を 読んだ か？
3. 学会等名 能楽学会2020年度世阿弥忌セミナー「世阿弥伝書を読む能役者：世阿弥伝書の受容・変容」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 玉村 恭
2. 発表標題 羽衣 の映像に添える記譜：笛の記譜と演奏について
3. 学会等名 第32回能楽フォーラム（能楽学会関西例会）「記譜を通じて能の面白さにせまる： 羽衣 全曲の映像化をテーマにして」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 玉村 恭
2. 発表標題 まとまりすぎてはいけない：世阿弥 序破急 論と 成就 の美学
3. 学会等名 美学会東部会2019年度第1回例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 玉村 恭
2. 発表標題 隠れた能楽師たち：佐渡市某所の音楽作り
3. 学会等名 日本音楽学会第70回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 玉村 恭
2. 発表標題 「能楽」の新たな可能性：地域の文化資源（伝統芸能）を活用した学生合宿研修活動の企画と推進
3. 学会等名 大学と地域が連携した地域づくり活動報告会 ～域学連携ミーティング～（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 玉村 恭
2. 発表標題 民俗芸能を授業でどう扱うか、そしてそのために民族音楽（学）研究は何をすべきか
3. 学会等名 日本音楽教育学会第34回北陸地区例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 玉村 恭
2. 発表標題 楢尾での「地域活性化」を考える
3. 学会等名 平成30年度大学と連携した地域活動報告会（招待講演）
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 玉村 恭
2. 発表標題 伝統的な教え方とはどのようなものか：明治・大正期能楽を例に
3. 学会等名 日本音楽教育学会第33回北陸地区例会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 上越教育大学	4. 発行年 2022年
2. 出版社 上越教育大学出版会	5. 総ページ数 257
3. 書名 「人間力」を育てる：上越教育大学からの提言6	

1. 著者名 藤田隆則（編）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター	5. 総ページ数 195
3. 書名 能 羽衣 を解剖する：音曲面を中心に	

1. 著者名 美学会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 735
3. 書名 美学の事典	

1. 著者名 玉村 恭	4. 発行年 2020年
2. 出版社 春秋社	5. 総ページ数 336
3. 書名 おのずから出で来る能：世阿弥の能楽論、または 成就 の詩学	

1. 著者名 松岡心平（編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 森話社	5. 総ページ数 432
3. 書名 中世に架ける橋	

1. 著者名 上越教育大学	4. 発行年 2020年
2. 出版社 上越教育大学出版会	5. 総ページ数 265
3. 書名 「人間力」を考える：上越教育大学からの提言5	

1. 著者名 上越教育大学大学改革推進委員会「21世紀を生き抜くための能力+」ワーキンググループ	4. 発行年 2018年
2. 出版社 上越教育大学出版局	5. 総ページ数 246
3. 書名 「実践力」が育つ教員養成：上越教育大学からの提言4	

1. 著者名 玉村 恭	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東京大学大学院人文社会系研究科博士論文	5. 総ページ数 153
3. 書名 成就の詩学：世阿弥能楽論の芸術論的特質	

1. 著者名 美学会	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 未定
3. 書名 美学の事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------